赤羽別院報 第42号
発行所
真宗大谷派
赤羽別院 親宣寺
〒444-0427
愛知県西尾市一色町赤羽上郷中14
Tel・Fax（0563）72－2308
Eメール
akabane_betuin@katch.ne.jp

『御文』に学ぶ

様々な信じる

人は、色々なことを見たり聞いたりします。「そうだなあ」と思えればいいけど「そうなのか？」と疑うことも出てきます。

最初から、全く疑うことなしに正しいと思い込む「信」もあれば、疑う気持があっても、それを振り切ってまで信じ込もうとする「信」もありましょう。

これらの「信」に対して、親鸞聖人の仰ってくださった信は「正信」といいます。

正信には二つの意味があり、一つは「正定聚の信」であると、お念仏のお仲間と同じ思いを抱かれましたか？という意味です。

もう一つは、正という漢字は「一」と「止」が合わさっています。ですから、いつ、どんなことがあっても、いつでもそこへ立ち返ることができる、即ち、一なるものを見失うことのない、それを「正信」と言われるのですね。ですから「正信」とは、正しいとか間違っているとかの問題ではないのです。

では「迷信」ですが、「私は迷信を信じます」という人はいません。今まで思い込んでいたこと、信じ込んでいたことは間違いだったと解放されて、初めて「迷信」という言葉が生れてきます。

『御文』

蓮如上人の『御文』は、現在二五〇通ほど残されています。

私たちは、このうち五帖八十通を『御文さま』として、日々いただいているわけです。お手紙ですから、結びのところは手紙のきまり言葉で終ります。八十通のうち七九通は「あなかしこあなかしこ」ですが、二帖三通目の一通だけが「件（くだん）のごとし」で結ばれています。これは「これ以上申し上げることはございません」と強く言い切っておられる言葉です。

「あなかしこあなかしこ」は、「本当なら、直接お伺いしてお顔を見て、膝を交えて聞いていただかねばならない事ですが、手紙ですみません、よろしく」ということですね。

さて、蓮如上人は吉崎へ来られた当初、頻繁に『御文』を書いてはおられません。ご自身で直接出向いて、お話をされておられるからです。次第にお講が拡がるにつれ、あちこちから来て欲しいと願われます。体は一つです。だから『御文』が増えてきたんですね。

とくに、文明五（一四七三）年九月には、ひと月の間に十二通書かれています。このうち八通が『一帖目』に入っています。

この時に何があったのかと申しますと、文明三年の夏の終り頃に、蓮如上人は吉崎においでになられ、精力的に活動されました。みんなの声が聞こえてくるにつれ、親鸞聖人が顕かにされてきたお念仏への異義・異安心（自分に都合よくお念仏を理解し、喜んでいる姿）が見えてくるようになりました。

また、戦国の世という時代背景のなか、吉崎を利用しようとする侍たちとの駆け引きもあり、二年後の夏に一度は吉崎からの退居を考えられました。

しかし、蓮如上人を慕う人々への思いもあり、吉崎にとどまって再出発となったのですが、異義・異安心を念頭において書かれたのが文明五年九月ひと月の『御文』です。

ところで、皆さんは『真宗聖典』はお持ちですか？

私たちは、真宗門徒と名告りながら、親鸞聖人のお書きになったものを殆んど読んでいない。解っても解らなくてもいいから、毎日、指が触れたところを開いて声を出して読んでみましょう。「拝読」というのは、目で見て・声を出して・耳で聴く、三つ揃って「拝読」です。

ですから、『御文』の拝読も、聞いてもらうために読むのではなく、自分が聞かせていただくのです。

『一帖目九通』

この『御文』では、『涅槃経』で吉日良辰を選ばないこと、『般舟経』で仏・法・僧の三宝に帰依することをひかれて、念仏者としてのお心を教えてくださっています。

三宝に帰依するということは、どのような態度・姿勢・心構えなのでしょうか？

これは『般舟経』にも出てくる「余道（仏道以外の道・外道）に事うることを得ざれ」という姿勢です。因みに、安田理深先生は「余道という道はない。道がつくのは仏道だけである」とおっしゃっておられました。

余道とは、天を拝すること・鬼神を祀ること・吉良日をみることの三つで、『御文』の中ではこの全てを「～をえざれ」と教えられています。

この「えざれ」は頭ごなしに否定するのではなく、「必要ないことが解りますね、はっきりしましたね」という意味です。

『御文』は、こうしてはいけない・こうしなさいという上からの視線ではなく、私たち自身の目覚めを促してくださっているお言葉なのです。

鬼神を祀る考え方

ここで、天・鬼神・吉良日の順は、仏教と間違えられやすい順番です。三番目の吉良日は、吉日良辰と教えられており、吉日とは日の良し悪し、また、良辰とは方角のことをいいます。

例えば、丑寅（北東）の方角を鬼門といいますが、これは、中国の北方騎馬民族の侵入を恐れる古事に由来するもので、日本にとっては何の意味もないことなのです。

ところが、世の中には人間以上の力を持った何者かが、吉凶禍福を支配しているという考え方があり、これは、お釈迦さまがおいでになる前にもあった外道といわれる教えもそうです。

お釈迦さまは、外道の教えを大きく二つに分けられ、無因論（偶然なだけ）と、他因論（あなたは悪くなくて昔から決っていた）であり、私には責任がないのだということです。

鬼神に頼る生活・考え方は自分のことしか見えなくなり、自分さえよければ他人はどうでもいいとなるのです。

例えば、定員30人の学校の合格祈願に31人の人が神社に行ったら「私だけは是非とも合格を」とお願いし、自分しか見えなくなりますよね。

人は、自分の責任で生きていくのは苦痛ですが、他人や何かのせいにして生きるのは簡単です。これが鬼神を祀ることのご利益なのです。

仏法をいただく

蓮如上人がどのように「神」を捉えておられたかは、二帖三通目『神明三ケ条の御文』では、人の、生きものとしての・いのちを支える様々なはたらきが、せっかく支えるそのいのちを、決して空しく終ることのないように、念仏の法に出合って欲しいと願っておられる、そのはたらきを「神明」という、と教えて下さいます。

ここでいう神というのは、自然界の仕組みであり、ご先祖さまであり、決して鬼神のような自分に都合のいいもののことではありません。

最後に、重ねて申しますが、私たちがご縁をいただいた真宗を一層深いものとするため、毎日『真宗聖典』に触れ、常に親鸞聖人のお言葉のすぐそばに身を寄せておいてください。

その内容が解るとか、解らない、また、年齢が遅いとか、早いとかもありません。皆さま方の気持の持ち方です。

『御文』は、蓮如上人から私宛に届いた手紙だと思って、是非拝読して下さい。

平成26年8月23日
第9組・夏期講習会
日野賢之師講話要旨

■講師プロフィール
日野　賢之（ひの　けんし）
昭和22（1947）年
石川県小松市生まれ
大谷大学大学院　博士課程満期退学
元　東本願寺修練道場指導
現　東本願寺同朋会館教導
真宗本廟教化教導
推進員養成講座指導
小松市　西照寺住職

別院行事のご案内

帰敬式（ききょうしき）
4月11日(土)　午前11時
本山鍵役よりお剃刀を受けます。

報徳会（ほうとくえ）
4月11日(土)　午後1時
法話　第15組　願厳寺　安藤　誠也師

殉教記念法要（じゅんきょうきねんほうよう）
6月5日(金)　午後1時
本山鍵役御参修
法話　同朋大学仏教文化研究所　客員所員　蒲池　勢至師
※午前11時30分　殉教記念碑前法要、葬町

夏の御文（げのおふみ）
7月15日(水)　午後1時
法話　第10組　蓮正寺　稲垣　智師

声明研鑽会（しょうみょうけんさんかい）
6月4日(木)　午後7時～8時30分
7月2日(木)　午後7時～8時30分
講師　第8組　宿縁寺　織田　顕慶師

晨朝法話（じんじょうほうわ）　午前7時
4月13日(月)　第9組　正覺寺　櫻部　明師
4月28日(火)　同　妙隆寺　大渓　康照師
5月13日(水)　第10組　願正寺　三村　謙作師
5月28日(木)　同　法圓寺　石川祐美子師
6月13日(土)　第11組　浄徳寺　太藤　順誼師
6月28日(日)　同　浄賢寺　佐々木真哉師

御坊写真展・暮らし部

◇写真の作品を募集し、お御堂に展示
テーマ　自由（カラー・モノクロ）
サイズ　ワイド六ツ切以下
顕彰等　当面は無審査・顕彰なし
全員に記念品を添えて返却
展示　全作品を約二ヶ月間展示
応募　別院へ直接持参または郵送
年間を通して常時受付
奮ってのご応募をお待ちしています。

お寺の掲示板

生きているということは
死ぬ生命を
かかえているということだ
東井　義雄
第12組・願海寺

古田和弘師の真宗講座
「正信偈」に学ぶ

大寒の去る1月20日、当別院では平成26年度の真宗講座（全3回）の第1回目が開催され、大勢の聴聞者で賑わった。

この講座は「正信偈に学ぶ」をテーマに、大谷大学名誉教授・古田和弘師を講師にお招きして、本年が4年目となる連続講座です。

今回は、依釈段・七高僧の道綽章からお話をいただいた。

まず、中国の道綽禅師のプロフィールに始まり、代表的著書「安楽集」に説かれている自力聖道門と他力浄土門について解説され、また、「観無量寿経」に精通し、人々に称名念仏を奨励するなど、後の善導大師に深く影響を与えたことなどを解り易く、丁寧に話された。

その中でも「人間の罪悪は法律や道徳に触れることではなく、真実に背くこと。煩悩を消すことはできないが、喜びに転ずることはできる。」の一言はとても興味深く、印象に残った。

それにしても、いつもと変らぬ先生の飄々とした面持ちと、ユーモアを交えての語り口は、円熟の域に達しているが、その風貌からは計り知れない感がある。

日々の勤行は、音読みで習慣化され、流されることもあるが、和訳された意味を味わうことで、お聖教がより身近に感じられるのではないだろうか。

なお、第2回目は2月24日に開催された。

初鐘・修正会

初鐘

「消費税増税と急激な円安の進行が物価上昇をもたらし、インフレ化政策により株価の上昇はあったものの、庶民の暮しは決して豊にならなかった」平成26年を、人々がそれぞれの思いで送り、新年を迎える年中行事・除夜の鐘・初鐘は、冷たい北風が吹くなか、親子三代8人家族をはじめ、大勢の方々が鐘楼に上りそれぞれの願いを込めて撞木を引いた。

一里鐘といわれる今年の鐘の音は、ひときわ厳かに響き渡った。

修正会

除夜の鐘・初鐘に続き、午前7時から修正会が厳かにお勤めされた。

お声明のあと、三浦輪番の年頭挨拶では、平素皆さま方からお寄せいただく、ご理解とご協力・お力添えに対し、深謝の意が述べられた。

法話では、今日は、会話はなくてもお金があれば生活は成り立つ便利な世の中になった反面、経済は栄えても、人と人の和の精神・絆は頽廃する結果をもたらした。

即ち、これまで築きあげてきたものを自ら放棄し、勝手に生きて勝手に死んでいく時代になりつつあるといえる。

和讃を初讃に、お文を一帖目に戻してお勤めする修正会に因み「人の和と人間らしさを修正・再構築することが、現在を生きる私たちに課せられた宿題」と述べられた。

赤羽別院において
岡崎教区総合教化協議会開催

去る1月20日、第3回岡崎教区総合教化協議会が当別院で開催された。

当協議会は、昨年5月岡崎教区宗祖親鸞聖人七五〇回御遠忌法会の厳修を機縁に、中央教化センター（教区教化委員会）と地域教化センター（別院）が一体となった教化事業への取り組みを目指して設置されたものである。

この日は、辻森教務所長をはじめ、教務所及び4別院より選任された協議会スタッフ及び赤羽地域教化センタースタッフ併せて20名が出席した。

辻森教区教化委員長より「新しく掲げられた教区教化テーマ「見つけよう、生まれた意義と生きる喜び～生活の中心に南無阿弥陀仏を～」の周知と、願いを深めていくことから始めたい」と活動の方向性が示された。

この後、多岐に亘る事項について協議や意見交換が行われた。

教区内4別院には、財政面で相当な差異があること、静岡別院は遠隔であるうえに崇敬区域も広大であることや、それぞれの別院に地域特性があることから、画一的に捉えることには無理が生ずる等々の発言があった。

また、別院と教化センターの関係が一体化しない事情もあり、今後の協議のなかで現状把握に努めたうえで、懐重な協議が待たれるところである。

双全講厳修

冷たい雨が降りしきる1月15日、双全講が厳修され、熱心な聴聞者が別院を訪れた。

読経に引き続いて、福正寺住職・本多友明師の法話を戴いた。

師は、四苦・生老病死のなかでも、私たちからは最も見えにくく解りづらい生の問題を提起され、具体的に、正信偈の冒頭の二句「帰命無量寿如来・南無不可思議光」をとりあげ、さらに、浄土三部経にも言及され、日常生活の出来事と照らしつつ、教えの要をやさしく噛み砕いて示された。

「双全講」の発足は明治18年にさかのぼり、赤羽別院周辺の人々を中心に組織され、「法義相続」と「赤羽別院の護持」の二つ・双つを全うする強い意志を顕したことが、講名、双全講の由来である。

当赤羽別院だけに存在する、由緒ある「双全講」を次の世代に伝えていきたいものである。

安藤伝融師をお迎えして
赤羽ブロック坊守学習会

去る2月26日、赤羽ブロック坊守学習会が、第7組浄専寺住職・安藤伝融師をお迎えして開催され、約50名の坊守が出席した。

学習会に先立ち、三浦輪番の調声により正信偈同朋奉讃が厳修された。

この後、輪番及び中村坊守会長の挨拶に続いて「共に生きる本願の世界とは」をテーマに、拝むとは何かについて語られた。

また、私たちにとっては衝撃的事件として記憶に新しい、IS（イスラム国）の非人道的行為については、正義の名を元とする愚かなことと、漆間時国（法然上人の父）の最後の言葉「共に救われる道を求めてくれ」を例にとり、血で血を洗うあってはならない出来事であると具体的に話された。

更に、自分自身に向ける言葉として「人間は自分を問うことができない」など豊かな表現で話が進んだ。

最後に「共に生きる本願の世界」の具体的な解説のなかで、自然には毒やトゲのある物が沢山あるが、この事実を認める世界が大切であると話された。

考えさせられることの多い講話であり、一同が真剣な表情で聴聞した。

赤羽別院の歴史　その1

元禄13（一七〇〇）年、赤羽城跡地を与えられた、江戸公方の御家人・本目勝左衛門親宣により創建された「本目山親宣寺」は、寛政10（一七九八）年、東本願寺第二十代・達如上人の直意により「東本願寺赤羽別院本目山親宣寺」として、正式に東本願寺の直轄別院となり今日に至っている。

寺院創建から三百十年余、別院として二百十七年の歳月を経た、赤羽別院親宣寺の歴史について、当別院の世話方・三矢平市氏の草稿により、8回にわたるシリーズでお届けして参ります。

赤羽別院は、碧海台地先端に位置する島状の台地にあり、十二世紀頃から武家の統治下にあり、館城・赤羽城がおかれていた。

赤羽城のこと

赤羽城は、今川氏の勢力下にあった東条城（現・吉良町駮馬）城主吉良良昭氏に属し、配下の高橋氏の守城となり、百四十年にわたりこの地を治めていた。

永禄四（一五六一）年、今川氏と対峙する松平氏（後の徳川氏）の家臣・西条城（後の西尾城）城主酒井氏に攻められ赤羽城は落城した。

後になって、高橋家の子孫が城跡南東隅に一族郎党の菩提寺・瑞雲寺を創建、境内の金石文には赤羽城との因縁が明記されている。

この城跡地約三千坪の広大な土地が、後の世に赤羽別院に繋がることとなる。

蓮如上人開基の念仏道場

十五世紀室町時代、赤羽城跡地に本願寺中興の祖・蓮如上人開基（この時期は特定されていないが、蓮如上人の三河教化・応仁2≪一四六八≫年の三河教化の折としてよいと思われる）の念仏道場があり、宗祖親鸞聖人の念仏の教えの根源を布教され、人々は挙って念仏道場にお参りし繁華を極めていた。

然しながら、世は戦国乱世の時代となり、仏教・念仏布教に対する迫害か、いつの頃からか、この念仏道場は衰退の一途を辿り、荒廃し廃墟と化したのである。

このような時を経て、赤羽城跡地が本目山親宣寺となり、やがて、赤羽別院となるのである。（つづく）

竹鼻別院（岐阜県羽島市）
役員ご一行が来院

境内が冬の佇まいを見せる12月3日、竹鼻別院（岐阜県羽島市）より、輪番をはじめ5名の役員が当別院を訪ねられた。

竹鼻別院は、別院問題研究会でのグループ別分類では、当別院と同じ小規模別院・Bグループに属しており、現在、将来の地域教化センター構想を模索されている。

まず、当別院三浦輪番が教化センターの現況と現在抱えている課題等について、続いて、浅野前輪番より、教化センター設立の経緯とその後の歩みについて説明された。

この後、意見交換・質疑応答では、人材の育成・地域に根ざした教化事業の充実・財源の確保など、魅力と存在感のある別院にしていくための解決すべき問題点について熱心な議論が交された。

別院の運営・経営に関しては、それぞれの地域や教区における特性など に差異があるが「別院機能充実活性化」の目的は同じで、停滞しつつある別院を再構築するうえで、今後もこの種の交流が望まれるところである。

第8組一行百十二名が 本山報恩講団体参拝

冬が近づいていることを知らせる冷たい雨が降る11月26日、恒例の第8組本山報恩講団体参拝は、それぞれの集合場所で参拝者を乗せたバス3台を満席にして、早朝に西尾を出発した。

車内は、本山に参拝する期待感からか笑顔がいっぱいの行程となり、御在所S・Aで3台が合流し、途中、時間調整のための休憩を取りながら、予定どおり日中法要前に本山に到着した。

案内に従って御影堂に歩を進めると、堂内は既に満席の状態で、お互の肩を寄せ合いながらのお参りとなった。

宗祖親鸞聖人の御影堂の前で、御門首をはじめ、大勢の僧侶のご出仕のもとに、厳粛なお勤めが始まり、参拝者ともども、お声明の声が堂内に響きわたった。

境内では参考書籍の販売や東北物産展が開かれており、両手にいっぱいの土産を提げテレ笑いを浮かべる人がいた。

参拝後は、岡崎別院の付近が昼食場所となったこともあり、折角の機会だからと急ぎ足で同別院に参拝した二人連れの「念願が叶いました」と充実の笑顔が印象的であった。

帰路は、世界文化遺産に指定されている下鴨神社に立ち寄り、思い思いの社殿にお参りし、今や盛りと咲き誇る紅葉を堪能した後、同神社の入口にある鴨長明が、方丈記を著したことで有名な方丈の庵にも足を伸ばし見学した。

このようにして、充実感溢れる本山報恩講団体参拝の全行程を了えたバスは無事西尾に帰着した。

本山報恩講参拝記

第8組・安楽寺門徒　高須　和

昨年11月26日、第8組の本山報恩講団体参拝に、百名余の方々と一緒に出掛けた。

出発時は生憎な天候でしたが、車中でお喋りやビンゴゲームを楽しんでいる間に天候は回復し、3台のバスは無事に本山に到着した。

御影堂に入ると、堂内は立錐の余地がない程、全国からお参りのご門徒さんでいっぱいでした。

間もなく、大勢の僧侶が大きな声を張り上げたお勤めが始まり、一斉に手を合わせてお参りし、久し振りに厳粛な法会に出合うことができた。

一時間余りで参拝を済ませ、東日本大震災の「語りべ小屋」へ。ここでは「被災地の今」と題して、避難先で子ども達がいじめに遭ったことと、放射能による汚染の問題を、力強く語りかけておられたのが印象的だった。

報恩講参拝を無事に了えて、もう一つの参拝先・下鴨神社へ。この神社は境内の面積が12万4千平方米と広く、本殿2棟の他に社殿の数が53棟を数える大規模なもので、世界文化遺産に指定されている。

この中には干支の十二支が、七つのお社に分けて祀られており、皆さんはそれぞれ自分の生れ年の干支を中心にお参りされ、なかには、家族や縁故者の分もお参りされる姿も見受けられた。

このようにして、個人や家族だけではなかなか出掛けることができない、本山報恩講のお参りのみならず、名所めぐりのおまけつきで、新しい発見ができ楽しい旅となった。

西脇 真師 をお招きして 第13組 女性聞法会を開催

昨年12月13日、一色町の明栄寺では第13組が主催する「女性聞法会」が開催され、参加者が70名を超す盛会となった。

同組では、最近各種行事への女性の参加・参拝が減少傾向を示し苦慮していたが、折しも教区から女性聞法会推進方要請もあり、今回の運びとなった。

会の運営には、住職・坊守に女性門徒が加わり、受付その他を分担され、参加者を含めて若年層の姿が多く、次の世代への聴聞伝承を願う主催者の篤い思いが感じられる法会であった。

講師に浄土真宗本願寺派普元寺住職・西脇真師（法話楽団・迦陵頻伽を主宰）を迎え「悲しみの向こうであなたに遇える」を講題に、お話の合間に歌を交えて進められた。

最初の「しんらんさま」の歌で堂内の雰囲気が和やかになり、シンセサイザーの伴奏に乗り全6曲が歌われ、それぞれの歌詞に込められた真宗の教えを丁寧に解説され、皆が神妙に聴聞した。

見返りを求めない仏の大悲を母親と子どもの関係に例えて、切々と語りかける師のお話は、この会の趣旨に整合するものであった。

子供報恩講 高校生の折り紙教室

第14組 興専寺

小学生の二学期終業式が終った12月22日午後、第14組専興寺では子ども報恩講がお勤めされた。

この行事は、同寺の年中行事として地域に定着しており、当年は、刈谷東高校の「折り紙部」の男女生徒17名を招いて「折り紙を楽しもう」をテーマに開催された。

小さい子どもには、若いお母さんやお婆ちゃんの付き添いもあり、参加者は百名を超す盛会となり、家族揃ってのお寺参りに心あたたまる光景があちこちで見受けられた。

正信偈のお勤め、仏典童話を用いてのお話の後、先生とグループに別れた生徒の折り紙教室では、動く青虫くん・ペンギン・祝い鶴等々の作品が次々と折り上げられ、互いに自慢げに見せ合っていた。

女の子の楽しみと思われる折り紙だが、男子児童が真剣に取り組んでいたことが特筆されるイベントであった。

女子高生は「みんなが喜んでくれて良かった。私たちにとっても良い機会でした」と。

最後に、お手伝いの方々の手作りのたこ焼パーティーで子供報恩講の幕は降りた。

みんな真剣な表情

御寄進 吉崎仏壇店様より 瓔珞・輪灯 各一対

この度、お内陣荘厳の御本尊前「三重瓔珞一対」並びに、親鸞聖人絵像厨子前の「輪灯一対」を、吉崎仏壇店・吉崎節子氏より御寄進いただきました。

瓔珞一対

輪灯一対

同仏壇店におかれましては、かねてより当別院に対し格別のご配慮を賜っているところであり、重ねてのご懇念に対し厚くお礼申し上げる次第であります。

葬儀あれこれ 家族葬について

最近、よく耳にする言葉に「家族葬」があります。

家族葬という言葉には定義はなく、本当の家族のみでの葬儀・親戚或いは町内の方にはお参りいただく葬儀等、何れも家族葬といわれていますが、家族葬なる葬儀そのものが、家族葬の名のもとに、送る側にとって都合のよいと思われる葬儀のことを指しているといえます。

葬儀にかかる費用が抑えられそうとか、後々のことを含め人間関係やお付合いの負担が軽くなる等が、家族葬を選択する主な理由ですが、結果として、香典収入が少なく経済的負担が大きかったとか、事後に香典等を持参される方々への対応に苦慮した話をよく耳にします。

どちらの家庭にも、それぞれの事情があると思いますが、葬儀は、お亡くなりになった大切な方をお送りする一度きりのご縁です。

目先の経済性や人間関係の負担にとらわれることなく、誰もが通る道を慎重に考えるべきではないでしょうか。

お寺の天然記念物

専念寺のクスノキ

西尾市指定・天然記念物

西尾市上羽角町郷内2
第8組・専念寺境内

根回り　七・九八米
胸高囲　四・一〇米
樹高　約二八米
樹齢　約二〇〇年
指定　昭和五一年

セレモニーホール碧雲はお陸様で18周年
お客様のニーズに合わせてご利用頂ける3タイプの会館
隣接駐車場も完成し、益々便利に……
～故人様との最後のひと時を心を込めてお手伝い致します。～
もしもの時はお電話下さい。
年中無休/24時間受付
葬儀・法要　セレモニーホール碧雲
㈲具田商店
【お問い合わせ先】
TEL0566-41-0455
〒447-0058　碧南市住吉町3丁目18番地
別館　特殊（本館）　事務所　駐車場150台

思いやりとまごころの
お仏壇の たなか
TEL 0533-67-9700
株式会社　蒲郡田中仏具
蒲郡市拾石町塩浜63番地

神社仏閣・墓石・石積・石加工
設計施工全般
杉新石材店
〒444-0324
愛知県西尾市寺津町南若王子45
北若王子
TEL・FAX〈0563〉59-4105

■■■カルチャーウォーク・その19■■■

みんなで護り続ける 安城市昭和町 碧海教会を訪ねる

JR安城駅北口から数百米の緑に囲まれた空間の中に、二層の鬼瓦が目を引く巨大な堂宇が姿をみせる。

明治31（一八九八）年に碧海説教所として創設され、今もお第17組の寺院と安城市を中心とした真宗門徒が心の拠所として護り続ける碧海教会である。第17組組長・明専寺住職・藤岡敬師を教会に訪ね話を伺った。

訪問した1月20日には、今年初の法会・報徳会が厳修されており、境内に入ると、二百畳近いお堂と、庫裏・書院の規模の大きさに驚嘆した。

同教会では、毎月の祠堂法要をはじめ、報徳会・同朋教室・報恩講・相続講大会・夏期真宗講座・夏の御文など、年間に18回の法座が開かれ、法・講話を聴聞することができ、正に「碧海説教所」の名称で発祥した趣意が、一世紀余を経た今も受け継がれている。

そもそも、なぜJR駅近くのこんなにも広い敷地に大きな説教所ができたのか？その背景を考察するに、安城の発展の歴史とともに歩んでいることがうかがわれる。

即ち、明治13年に明治用水が貫通し、雑木林が農地に転換する中で東海道本線が敷設され、同24年には安城駅が誕生し駅前に町ができ発展した。

一方、説教所は明治29年に本山の設立認可を得て、同31年8月8日本山直轄の説教所として、鉄道を挟んだ駅の北側の現在地に現存のお堂と庫裏・書院が創設された。（名称・碧海説教所は、昭和17年の宗制改正の際「碧海教会」に改められ今日に至る。）

町の発展に合わせるかの如く説教所の施設は、地元の学校の教室や仮寄宿舎、鉄道会社の株主総会等の会場に提供され、大正14年5月の花まつりには、児童一千八百余名と行政・教育・仏教会の代表の方々が参加したとされる。

このことは、地域と共に発展してきた教会が、その枠を超えて地域の基幹施設として機能してきたことを意味する。

このような経過をたどる説教所創設間もない明治33年の「三為会」の講演会に関し、真宗を代表する著名な教学者多田鼎は『清澤満之全集』において「8月11・12日の両日安城の説教所で開かれた三為会は、自分にとって尊い記念の会であった」と記し、暁烏敏は「清澤先生がおみえになり、多田鼎君も佐々木月樵君も来るというので自分も行った。先生を囲んで会堂の縁先で西瓜を食べながら、蚊に喰われるのも忘れて鶏が鳴くまで語りあった」と『浩々洞時代の清澤先生』に記している。

取材日も、大勢の地域の世話方と聴聞者に支えられ、本来の教化活動に専心される姿にお目にかかることができた。

人間模様 その16

お寺の住職は男性という既成感念のなかで、数少ない女性住職として、赤羽別院列座として、更に教化センター儀式部長として精力的に活躍をされる第10組法圓寺住職・石川祐美子師を訪ね、僧侶になった経緯や苦労話、また、現在の心境や今後の真宗寺院のあり方等をお話しいただいた。

―「女性住職」となられた経緯は。

子供二人を抱え、将来を模索していた折、住職である父が「寺へ帰ってこい」と言ってくれたんです。父は、私が寺に帰って5年後に亡くなりましたが、その間一度も私に「寺を継げ」とは言いませんでした。

そのことを今考えてみると、反発心が強く親不孝者の私に対する父の深慮だったに違いありません。

私にできること・すべきことは、寺を守っていくことだと気付きました。

住職への道は、父が私につけてくれた、たった一つの道筋だったのです。

御伝鈔拝読

―住職という立場になり何か変化は。

寺に入る前は、全ての面において責任感がありませんでしたが、今は住職であることを念頭におき、寺のことを一番に考えています。

同朋大学の別科で学んだ時それを強く感じたし、お寺では、役員・門徒さんたちに力強く支えていただいているからです。

―住職になって苦労されたことは。

法衣の着付けに神経を使いましたが、暫らくで慣れてうまくできるようになりました。

また、当初は女性という意識が強く、気持のうえで構えたところがありましたが、別院の列座になり、皆さんに温かく迎えていただき、いろいろなことが吹っ切れました。

「出しゃばってはいけない」とか、「よく気がついて可愛いくって」など、女だからというもう一つの肩書を捨てることができました。

僧侶として生きていくと決めたからには、不要なものは捨てなければならないのですね。

苦労といえば、僧侶の本分であるお声明において、男性とは声質等に違いがありますが、切磋琢磨を重ねて上達を目指す所存です。

―住職の立場で今後の真宗の寺に必要なことは。

法会であれ、お茶を飲みながらの世間話であれ、まずはお寺に足を運んでいただくことが大事ですね。そこには人がいるという安心感が必要です。

それと、坊守さんは縁の下の力持ちといわれますが、役員会や、各種法座に同席し、門徒と住職以下寺族が同じ立場で話し合う場とするなど、新しいお寺のカラーを出していかなければならないと考えています。

一年に一度は赤羽別院へ

門徒の声

私の憂い

国際社会で、また悲しい事件が起こりました。

「イスラム国内」で二人の日本人の命が奪われたことです。

亡くなられた一人であるジャーナリストの後藤さんは「何が起っても責任は自分自身にある。恨むは人の業に非ず。裁きは神の領域。」と云われたそうです。

この言葉には、正義感と使命感が溢れ、キリスト教の洗礼を受けた後藤さんらしい生き様がそこにあります。

また、「彼の意志を継いで、憎しみの連鎖だけは断ち切ってほしい。」と、心を痛めながらも社会を憂いている近親者の姿がありました。

『歎異抄』第3章「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」の他力本願をいただく私はどうであるか？

この度の悲惨な事件を目の当りにして、只ただ憂うばかりでした。善も悪も全てが曖昧な「人間の尺度」による視点でしかなく、「仏の視点」による善でなければならない。即ち、裏返せば現世で「悪」を生きる私たちなんだという教えが深く響いてきました。

ある意味において「悪」を生きることは、生きるための活力において消極的に思われがちだが「絶対的な神と神が争っているこのとき」に、この世の中に「絶対」は無に等しいと教えて下さる「真実という仏法」に出会っては忘れてしまう愚かな自分、そういった自分を憂う自分でもありたいと思うこの頃です。

第9組・若正寺　坊守　中村　郁子

訃報

◆齊藤　ふみ子様
第14組・平等寺前坊守
平成27年1月10日御命終
享年　95歳

◆三浦　了信師
第8組・慶昌寺住職
平成27年2月19日御命終
享年　83歳
謹んでお悔み申し上げます。
合　掌

第10回 御坊俳壇・川柳

俳句（順不同）

お降りや　内陣暗く　十二仏　蓮沼たけし
裸木の　公孫樹は天を　突く勢ひ　石川　松葉
白きもの　きらつと干され　花八ッ手　鎌田　晴枝
手話の指　影絵となりて　日脚伸ぶ　加藤　久子
托鉢の　寒雨に濡れし　脚絆解く　中根　幸子
様や　得度を決めし　若坊守　大渕　美恵
朱蠟燃ゆ　中尊前の　初勤行　信川　芳枝
里人の　情は深し　七草粥　鈴木いわほ
春を待つ　山門の獅子　四方睨む　新家ゆり子
御影堂　照らさる銀杏　黄葉かな　藤原　寛

選者　三浦　貞葉氏他

川柳（順不同）

念仏し　喧嘩解決　老夫婦　榊原さちよ
落慶に　笑顔溢れる　稚児の列　杉浦　幹
くしゃみ幾度　言葉にならぬ　言葉かも　斎藤　浩美

※お知らせ！

次回の締切りは5月10日（日）です。
奮ってのご応募をお待ちしています！

編集室

赤羽御坊新聞懇志

・第10組　厳西寺同行中様

貴重なご懇志を
ありがとうございました。

お詫びして訂正

赤羽御坊第41号4頁の赤羽御坊新聞懇志に誤記がありました。謹んでお詫び申し上げ次のとおり訂正致します。

正　第10組　妙専寺
誤　第10組　明泉寺

赤羽別院では、別院会計と教化センター会計の処理が一体で、現体制では、広報部から照会しなければ事実確認ができません。今回の誤報は、担当者から広報部への連絡ミスに起因するものです。

情報伝達網の整備確立

教化センター発足以降広報部では、季刊新聞・赤羽御坊を27回発行して参りましたが、掲載記事の大部分が広報部からのアプローチによる情報収集・取材により編集されています。

このため、情報入手が遅れがちとなり、別院をはじめ、崇敬寺院のでき事を広報部が追いかけて記事にしているのが実情です。また、校了後の記事の差し換えも発生し、これらのことが誤字・誤報につながる原因の一つとなっています。

この問題解決に当っては、広報部及びスタッフのスキル向上が望まれる一方で「輪番はじめ事務方執行部及び教化センター4部及び組長間の情報連絡網の整備・確立」が必要であると考えます。

新聞に求められることの一つは、あった事、これからしようとする事等を、ご門徒さんに正しくお知らせすることであり、全てが文字で表現されるため、一字一句たりとも誤りは許されません。

現在の広報部は、8名の現役僧侶と1名の門徒で構成されていますが、全員が素人のボランティア集団で、新聞の発行に当っては、企画・割付・成文・デザイン等編集作業の一切を広報部で行い、植字・印刷を業者に発注しています。

今後とも、最善を尽して編集・発行に努めて参りますので、関係各位のご理解とご協力及び積極的な情報提供をお願い申し上げる次第であります。